

花嫁の花嫁

汝の書きたいように書くがよい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マクシミリアン・ド・フェレル。

それはとある子爵家の一人娘として生まれ、一人息子として育てられた者の名だ。

完結

目次

1頁：フェレール家長男	1
2頁：縁談	9
3頁：秘密	16
4頁：真実	24

1頁：フェレル家長男

私の名はマクシミリアン^{Maximilian}。姓をフェレル^{Ferrere}という。フエンデイルの由緒正しき子爵家の長男であり、正統なる後継者——ということになっっている。

領地は王都デイクールより北西、エレディア大三角州より西の僻地である。かつてフェレル家は子爵家の底辺とも言える僻地の領主であったが、近年の大三角州への入植への協力を惜しまなかったため、領地は拡大され、財産も増え一族は軌道に乗り始めた——というものも私が生まれるまでの話だ。

私は人間ではない。私はナイトメア、生まれながらに”穢れ”を持つ忌み子だ。額に角を持ち、異形のまま生れ落ちて母を殺した。

私の母には私以外の子供がいなかったこともあり、不謹慎な言い方をすればそのおかげで私は殺されずに済んだのだ。(ナイトメアは忌み子として生後すぐに殺されることも多いと聞く)

とはいえ現女王の即位(正確には王の崩御。双子姫は即位を拒んでいる)から風潮は変わりつつあるものの、やはり女性が当主になることに忌避感を覚える者は少なくない。

そのため私は男性として育てられてきたのだ。

だがそうして隠し通せるのもそう長くは無い。ナイトメアというのは不老種族だ。私が老成し始める時期になっても若いままではあらぬ疑い——ナイトメアであるということの他にも、リヤナンシーやラミアが入り込んでるといふ疑惑——をかけられるだろう。

だがその時期までに私が成人すれば当然、政略結婚の話が切り出される。これを上手く避けるか、あるいは金を握らせるなりして性別を誤魔化す他ない。子供ならば養子でもいい。(さいわい私の一族は血統へあまりこだわらない方だ)

本書はその際の一悶着に関する私の随想を収めたものだ。欺瞞に塗り固められた人生の中にもこのような真実があったことを、誰かに記憶してもらいたい。願わくば永久に忘れることなく生き続ける同族に。

◆

話は私の15の誕生日に遡る。フェンデイル（というよりはラクシア、テラスティア大陸全土）では人間は15で成人と扱われる。この歳にもなれば今までのらりくらりと避けていたお見合いも避けて通れない

そんな早朝の事である。いつも通り既に起床していた私は自室の壁が叩かれる音に振り向いた。

「お早うございます、マックス様。父上がお呼びです。身だしなみを整え次第部屋へ参じよ、とのことですよ」

「わかった。下がっていい」

侍従からの簡単な伝言だった。ドアは開けられない。私が女性であることを知るのはこの家では父上と侍従長のみ。一部の侍従は感づいているようだが父上が釘を刺し他言無用を徹底させている。現時点で外には漏れていないはずだ。

私は寝間着を脱ぎ、下着を外し、鏡の前に一糸纏わぬ肢体を晒す。きつい下着で締め上げられた胸は貧相ながらも女性性を感じさせ、ふくらみを帯びた下腹部が隠しきれずにいる。

直毛の銀髪は長くのびし、この紫色の瞳と目が合えばきつと世の男たちの目を釘付けにするだろうし、美しく着飾り化粧をすれば誰よりも美しくなれると侍従長は言う。

だからこそ、その髪を短く切り揃えて色気のない表情を作らねばならないとも言う。

こんな日なのだ。結婚の話に他ならないだろう。この身体をどこまで隠し通せるか、今一自身は無い。そんな不安を抱えつつも私は水差しと桶を用いて濡れた布を作り、体を拭く。

着替える前には外した下着を再び着ける。下着と言っても包帯の様な簡素なものだ。これできつく胸を締め上げ、発育を抑制させてきた。

ひとしきり服を着終えて鏡を見る。大丈夫、中世的な男性にしか見

えない。そう自分に言い聞かせてドアを開ける。空腹はまだ感じない。感じる余裕などない。

「父上、私です」

「入れ」

ノックして訪ねてからそつと重厚なドアを開け部屋へ入る。執務机にかけた父上とその傍に控える侍従長のノエル^{No.1e}。そのどちらもが真剣な面持ちで私を見つめている。

「今日でお前も成人した。それがどういうことかわかるな？」

「無論です。父上」

今晚、お見合いに出されるという事だろう。

「して、相手はどこの方でしょうか」

「遺跡の街”リーリウム”の方に領地を持つ男爵家だ。姓はリヴィエール^{Riviere}。数代前に冒険者が成り上がった家で、規模も小さい。そう気負う相手ではないさ」

「お気遣いに感謝致します」

私がまだ幼かった頃の父上はたいそう私に対し厳しく接していた。自分の妻を殺されたのだから当然の反応だろう。私は忌み子だ。

いつからかはおぼろげだが、ある時期から父上は私に優しくなった。仮にも妻の子であるという事実を受け入れられたからか、必要以上に厳しくすることはなくなった。

あるいは、自分の性別をひた隠し生きる苦労を理解してくれたか、それは私には推し量りかねることだ。

「馬車の手配は済ませている。場所は王都デイクールのリルズ神殿の一室を借りる。出発は今日の昼下がりだ」

融合神リルズ。ラクシアに数多存在する神の一つで、最もその神格が弱い小^{マイナーゴッド}神に分類される。かつて蛮族によって引き起こされた大参事^{ディアボリック・トライアンフ}の大破局の折に柱の下敷きとなった恋人たちが互いを励まし合い、その姿に感銘を受けた月神シーンに導かれ神格を得たとされている。その現場がこのフェンデイルだとされ、王都デイクールは世界最大のリルズ神殿を有している。

その教義は「絆」「結合」「愛」「協力」「共生」など。確かに縁談の

会場として申し分ない。ここからディクールまではおよそ3日、馬車に揺られなければならない。朝早くに呼び出したのはその準備をさせるためだろう。

とはいえいささか急すぎる。かねてより決まっていれば事前に準備することも叶うはず。

「構いませんが、いささか急では？」

「本当ならもう少し早めに届くはずだったそうだ。道中で蛮族に襲われて信書を紛失したみたいでな」

「遣いの者もないようですが」

「『ファミリア』の鳥に通話のピアスを運ばせてきたのでな」

真語術師ソニーサラーの使役する使い魔ファミリア、使い魔というよりは自分の分身の様な存在であつたと記憶している。また通話のピアスというのも遠隔地で連絡を取るための魔法の品であつたはずだ。

「成る程、納得しました」

「衣類や食料は侍従に用意させている。お前は自分の携行品だけ用意すればいい」

「承知しました、父上。して、縁談についてですが・・・」

「汝のしたいように為すがよい」

それは邪神の言葉です。などと冗談で笑うことなど私にはできなかった。

「それはどのような意図ですか？」

「相手の家の規模を考えれば我々の力を用いて性別は誤魔化せるといふ事だ。自分の配偶者を選ぶ自由くらいは与えてやりたいのでな」

◆ その言葉が本心であるかは私にはわからなかった。

ルキスラ帝国軍や冒険者の活躍により、ザルツ地方の蛮族の活動は比較的散発的だ。それでも下級妖魔の襲撃や場合によつてはドレイクやバジリスクのような上級蛮族、稀にだがサンダーバードのような危険な幻獣との遭遇もあり得る。

ゆえに貴族の行楽であれど武装は欠かせない。ましてこのような僻地の貴族であれば武芸を嗜むのは当然だ。私はそれに加えて妖精

魔法の扱いも心得ている。

私は自室に戻ると壁にかけていたレイピアを鞘から抜き、数回素振りする。大丈夫、鈍ってはいない。

服も肌着を残して一度脱ぎ、タンスの中の質素な服を取り出す。イスカイアの魔導甲冑と呼ばれる業物であり、魔法戦士の魔法行使を補助する力の他、その形を自在に変える力もある。平時の際は礼服、有事の際は鎧となる優れたものだ。

私は普段着の形のままの甲冑を着ると、襟を掴んで念じる。こうして魔導甲冑はその形を変えられることができる。

重厚な鎧の形、軽装鎧の形、礼服、普段着と変化させ、不具合がないことを確かめる。

そののちタンスから装飾品を取り出す。カトレアの花冠、華美なる宝石飾り、矢筒とその中に入れる矢。

いずれも妖精魔法の行使を手助けするためのものだ。

花冠は魔法の射程を強化し、宝石は妖精魔法に欠かせない妖精の召喚ゲートとなる。矢は風の妖精の力を借りて撃ち出すためだ。

特に花冠は私の額にある角を隠すことにも役立つ。

最後に魔力の結晶である魔晶石をいくばくか取り出して袋へしま
う。

必要最低限の物は父上が侍従に用意させているのだ、私の準備はこの程度でいいだろう。甲冑を普段着に変える。

そうして一息つくつとふいにドアがノックされる。

「若様、朝食をお持ちしました」

◆ もうそんな時間だったか。

大三角州で取れた魚介は氷の妖精魔法で冷凍され、周辺のフェンデイル領と交易に出される。魔法は確かに私達の文明を豊かにしている。

朝食の内容は季節の野菜にハーブで味付けした白身魚、玉蜀黍のスープ。消化によく、急な出立にも優しい献立だ。

プロの調理師の腕に舌鼓を打ち、腹ごなしに屋敷の中庭に出てレイ

ピアを素振りする。

この武芸、僻地の貴族なりの護身のためでもあるが、女性らしく華奢な外見をしている私が男性として下手に見られぬようにでもある。「若様、組手を致しますか？」

ノエルだ。背中に長銃を背負い、腰には二丁の拳銃を下げている。肩の横には紫色の小さな結晶が浮かび、足と腰に着けている機械の装身具の側には大きな結晶が浮かんでいる。

マギスフィアと呼ばれる魔動機術の行使に必要な魔法の品だ。今朝から着ている服もただのエプロンドレスに見えるが、これも魔法の鎧の一種だ。コンバットメイドスーツといい、魔法や毒の攻撃を軽減する効果がある。

そのように武装したノエルはただのノエルではない。彼女もまた私と同じように人間でない。だがナイトメアでもない。

彼女はルーンフォークと呼ばれる種族だ。人造人間であり、魂を持たず、主人を欲するという本能を持つ。

人造人間といっても機械仕掛けではない、血が通い、肉と骨で体はできている。人族として標準的な知能や感情も持ち、奴隷として作られた経緯とは裏腹に人権を得た経緯がある。

ルーンフォークの製造技術はディアボリック・トライアンフ大破局を境に滅びた魔動機文明と共に失われた。現代では僅かに残ったジエネレーターによって辛うじて種の存続を保っている。

そんなルーンフォークらしくノエルは魔動機術の扱いに長けている。《射手の体術》と呼ばれる心得もあり、敵に肉薄しながらも銃撃を行うことができる。

これはひとえに私をより近い位置で守るためだそうだ。

「ヒーリング・バレット」で頼む。私も鞘を使う」

「承知しました。では失礼します」

私が甲冑を重厚な鎧の形に変えた瞬間を合図に戦闘が開始する。

ノエルは一瞬身を屈めると同時に二丁の拳銃を抜き取り、四発立て続けに銃弾を撃ち込む。この銃弾には回復の魔力が込められているため仮に当たっても怪我することはない。だがこれは組手だ。避け

なければ意味がない。私はそれを身を捻って回避する。

次の瞬間には大きく息を吸い込み、足と目に力を込める。

——練技と呼ばれる技術で、呼吸を用いて体を強化するものだ。

目は猫のように鋭く、足は鹿のように力強くしなやかに、そして私は駆け出した。ノエルは右足を半歩引き私の攻撃に備えている。

私は鞘を下から逆袈裟に振り抜く。様子見の初手は頬を掠めるに留まり、上半身を反らせたノエルはその勢いで宙返りしつつ私の手元を蹴り上げにかかる。咄嗟にそれを避けたために私の姿勢は崩れた。そこにすかさずノエルの弾丸が二発飛んでくる。

当たったか、一瞬諦めたが次の刹那にはノエルを見習い、崩れた姿勢を無理に直さずそのままの勢いで地面に転がり込んで回避する。

そうして立ち上がる勢いでノエルの懐に飛び込み、首筋に鞘を突きつける。それと同時に額に冷たい感触を感じる。

ノエルの銃口を突きつけられていた。

「腕を上げましたね、若様」

「まだ敵いそうにありません」

「魔法を使われたら勝つ目はないでしょう」

「そちらこそ連射弾は使えなかった」

私が軽く微笑むとノエルも微笑み返す。何かと窮屈な屋敷暮らしだが全てのしがらみから解き放たれる組手の時だけは嫌いではなかった。

「マックス、時間だ」

2階の窓から父上が呼ぶ。少し熱に浮かされすぎたようだ。



以上が私の成人した日の午前の出来事である。

なんとなくでも私を女性として見て、女性として接してくれる人がいないということは伝わっただろうか。伝わっていれば幸いである。

このお見合いは私にとっても運命の出会いであり、幸運であった。どのような出会いがあったのか期待に胸を膨らませながら頁をめ

くっつけてくれたなら私は嬉しく思う。

2頁：縁談

先ほどの頁より幾何か時は過ぎる。私を運ぶ馬車は豪奢なものでもなく、質素堅実な実用のものであった。随伴する家臣のものと大差はない。

随伴者はわずか1台ばかり、護衛は侍従長に加えて元冒険者の腕利きが2名。御者は私自身でもできるのだが、侍従長と元冒険者の二人が交代で行っていた。

街道の整備が進んでない土地を通るのだから過度な装飾が邪魔になることは勿論、あまり見せびらかすような装飾をして王都の上級貴族に目を付けられないためでもある。

三日間の道中での襲撃はボガードに率いられた数匹のゴブリンといった群れと3度遭遇したことに加えて、森のはずれで遭遇した野性のグリズリーが1匹。いずれも私が出る間もなく軽くあしらわれた。そうして何事もなく王都デイクールまで到達するに至った。



王都に訪れるのは初めてではない。今までにも二度訪れたことがある。一度はライフオス神殿で魔法「イレイス・ブランデッド」を受けて穢れを消すために、もう一度はよく覚えていないが何らかの会合に参じるためだったと記憶している。

父上が偶然にもライフオスの高位神官と知り合いで、このような浄化を受けることができたのはたぐい稀な幸運だと言えよう。

とはいえリルス神殿は訪れたことが無いので少しばかり私の気持ちは高揚していた。普段は男性として振る舞わなければならぬ以上、恋愛小説の類はあまり読まぬよう制限されてきたが、所詮私も一人の少女であったためにロマンチックな恋に憧れを抱いていたのだ。リルス神殿は恋人たちの聖地、心躍るのは無理もないだろう。

出発して3日目の昼下がりにには到着することができた。帝都についてすぐに郊外の土地に馬車を停める。護衛の一人がそれを見張る役を買って出てくれた。そこから私達は徒歩でリルス神殿へ向かう。

甲冑は普段着の形にしているため必要以上の視線は集めないが、侍

従長のエプロンドレスは少し目を引いた。といつても王都という事もあり侍従が買い出しに出ていることも珍しくないのか一瞥されることはあつてもジロジロと見られることはなかった。あるいは貴族の反感を買う事を恐れたか。

リルズ神殿はライフォスやザイアの神殿と異なり、荘厳さはやや劣るが装飾の意匠が巧みであった。趣があり、恋人たちの聖地と言われるのも頷ける。

入り口まで歩くと年若い神官の男が歩み寄り、フェレール家の者であることを確認すると私達は奥へと案内された。

「フェレール家の方が到着されました」

神官の男がノックをしてからドアを開けて中へどうぞと手で示す。

リルズ神殿はこのような用途で場所を貸すことも多いのか、縁談の会場となる小規模な部屋は適度に使用感がありながらも清掃が行き届いている。

部屋の入り口は北側にあり、南側に窓があるため中は適度に明るく、壁掛けの燭台は夜間以外使う必要はないだろう。

部屋の中央には8人がけくらいの大きさの机に椅子4つ、南側の席には一人の男性と一人の女性が座っていたのだが、ノックを聞いてから立ったようだ。(椅子が少し乱れているし、ドアが開く直前に物音がした) その後ろには一人帯剣した若い男が立っている。護衛だろう。

男は齡30代半ばといった顔つきでありながら、身体は鍛え上げられており、一切の老いを感じさせない。腰にはディフェンダーと呼ばれるハンドガードの付いた長剣をさしている。

礼服には僅か2つばかりの勲章が着いているが、そのどちらも男爵位であれば持つていて当然のものであった。

女はおそらく私の縁談の相手で、金髪の直毛はうなじ程まで伸び、やや色の濃い碧眼が私を見据えている。首にはリルズの聖印がペンダント状に吊るされている。

服装は瞳と同じ色のドレスをしつかり着ているのだが、きつちりした服装に反し顔色と表情は優れない。

私は椅子に座らず、机を避けて女のもとへ向かい、手を取り跪き甲にキスをした。

「リヴィエールのご令嬢様、ご機嫌麗しゅう。私はフェレール家の長男、マクシミリアン。マックスとお呼びください」

彼女は一瞬呆気にとられた後に我に返って返答した。

「遠路遙々感謝いたします、マックス様。わたくしはヴィエール家の次女、フェリシテ。フェルとおよびください。大変美しい方だと父上から伺っておりますが、まさかこれ程とは思いませんでした」

「呼び捨てで構いません。お褒めに預かり光栄です。しかしあなたもまた美しい」

社交辞令ではある。だが、少し言葉を交わしたことで緊張は解れ、顔色が回復したように見える。

「そちらの家の当主はいらっしゃらないのですか？」

「此度の縁談については全権を委任されています。ご心配なきよう」

彼はヴィエール家の当主のようだ。私は即座に受け答え、その後侍従長と共に着席した。



縁談は中々進まずにいた。政治に関する世間話を切り出し、そこから互いの家の歴史の説明や自己紹介で時間が過ぎていく。

聞くところによればフェルは花嫁修業としてリルズ神殿で10歳から五年間過ごしていたとか、先代当主はドレイクバイカウトを軽くあしらえたとか、それくらいで有益な情報はない。(バイカウトとなると私では手も足も出ない)

そうして雑談に時間を費やしすぎたために時刻は夕暮れに変わっていった。結婚の話は切り出されないうままである。

「フェレール家ご令嬢様、今晩はこちらに泊まられてはどうでしょう」

「ノエルがそれで困らなければ構わないが」

「わたくしのことはお気になさらず」

こうして私達は巡礼者向けの寝室で一晩を過ごすこととなる。一人一室でノエルとは別室になる。

馬車の見張りも神殿が引き受けてくださるとのこと、護衛の二人

には仮眠をとりつつ寝室の入り口を交代で見張るよう頼んだ。

私個人は特定の神を信仰しているわけではない。フェレル家は大三角州のエルフと交流を持つ以上、妖精神アステリアの教義に精通しているが、あくまで教養でしかない。

日も沈みきったにも関わらず不安で眠れない。そんな時に目についたのが寝室の机の上に置かれたルミエル・マイソロジーという本だ。

調和の剣ルミエルとそれに連なる神々——ライフオス、ティダンなど——の神話を収めた本だ。

私は光の妖精を召喚し、光源を確保すると徒然なるままにページをめくる。

次第に眠気がやってきて、寢床へつこうと思った瞬間だった。遠慮気味に戸が叩かれ、「起きてらっしゃいますか？」とフェルが呼びかけてくる。

「起きている。用があれば入るといい」

「失礼します」

静かにドアを開けて彼女は恐る恐る部屋へ入った。

「夜分遅くにすみません。どうしてもお礼を言いたくて」

「ことさら礼を言われることをした覚えはない」

「私の緊張を解きほぐしてくださいました」

「最低限の礼儀を徹底したまでだ」

軽く会話しながら私はベッドに腰掛ける。彼女は私の前に立ったままだ。私が椅子を勧めても頑なに座ろうとしない。それ以上会話も続かずに気まずい空気が漂う。

1分か1時間か、少なくとも私にとっては永遠にも等しい時間が続いた後にフェルが口を開く

「マックス様さえ良ければ私……」

彼女は目尻に涙を浮かべながら服をはだけ始める。

さしずめ既成事実を作り、なんとしても縁談を成立させろと命じられているのだろう。僻地の貧乏貴族の悲哀は父上より聞き及んでいる。

私は彼女の手首を掴んでその動作を止める。ここで肉体関係を持てば本来の性別が露見してしまうからだ。

「事情はわかった。でも自分を大切にするんだ。君の覚悟は消して無下にしないと誓おう」

彼女はハツとして私の胸元に顔を埋める。震える頭をそつと撫でる。

「申し訳ありません。私は……」

「言うな、泣きたいなら泣けばいい」

しばらくしてフェルも泣き止み、二人でベッドに腰掛ける。再び気まずい空気が部屋を支配する。

「わ、私……」

うつむく彼女にかけるべき言葉が何なのかはよくわからない。それでも私には彼女を突き放すことができなかった。

私は立ち上がると彼女の正面に立ち、腰を曲げて額に口づける。

呆氣にとられた彼女の腰に左手を回し、右手で彼女の左手を取って立ち上がらせる。

「続きは明日致します。今夜はお休みください」

彼女の手を引きながら、ドアを開け、案内する。

「はい、おやすみなさい」



翌日早朝、私は真つ先に夜の出来事をノエルに話した。ノエルは一瞬渋い顔を見せたものの「建前は無かったこととしましょう」と進言するにとどまった。

朝食は昨日縁談を行うはずだった部屋で会食形式で行われた。

「昨夜は如何でしたかな？ フェレール家ご子息様」

「何のことでしょうか。心当たりがございません」

「それはそれは失礼しました。ご無礼をお許しくください」

といった一幕はあれどあとは平穩そのものだ。昨日の夕食との違いは私とフェルの個人的な部分の話題が多くなったことくらいだ。

そんな会食が終わる頃になり、

「お父様、よろしければ日中マックス様と王都を観光したいのですが」

「大いに結構だ。楽しんでくるといい」

王都の治安は良好だ。しかし次女とはいえ娘が私と出歩くことをそう簡単に許可するのは如何なものか。不安を覚えた私は一つ問うことにした。

「ヴィエール当主、護衛は如何いたしますか？」

「君程の腕ならば必要なかろう。一応私の使い魔ファミリアを連れていくといい。」

実際王都の不埒者の数人ならば私の相手ではないだろう。それでも無防備すぎる。この男、ただの樂觀主義者なのだろうか。

考えても仕方がない。この男に私の家を失墜させることによる利益など今のところは無いのだから。

「承知しました。ご令嬢様はしっかりエスコートさせて頂きます」



外出は食後に準備を行ってからということになった。王都の観光に疎い私はノエルに良い行先はないか尋ねると、国営美術刊と”遺跡と花の丘”を薦められた。午前は街を見て回り、午後は”遺跡と花の丘”でのピクニックを行うべきとの助言だ。

私はノエルにピクニックのための軽食を頼んでフェルを呼びに行くためにドアを開けてノエルが使っている寝室から出た。

「あ……気が合いますね」

呼ぶまでもなくこちらの部屋の前まで来ていたようだ。

「すまない、待たせてしまったようだ」

「いいえ、そんなことはありません。私も丁度来たところですので」
フェルの足元には猫が付き添っている。彼女の父親の使い魔ファミリアだろう。見張られてるのはあまりいい気分がしないがこれも彼女の安全のためだ。

「午後は”遺跡と花の丘”でピクニックといきたいのだが、どうだ？」
「いいですね、是非とも」

昨晚の出来事もあってか自然と互いに言葉遣いが柔らかくなったように感じる。

しかし今、私の心には迷いが生じていた。私は確かにフェルを不幸

にしたくはないと考えている。だが、昨夜の約束はあまりにも無責任だつと後悔している。私の本来の性別を知つてなお同じように接することができるか、私が生まれながらに穢れをもつ種だと知つてどう思うか。

そして私自身、自分が誰かを愛せるのか。

男でも女でもない中途半端な自分が。



この日の記録は次の頁にも続く、しかしながら分量や区切りの都合で一度注釈を挟むことを許してほしい。

3頁：秘密

王都の街は活気に溢れ、人通りも多い。治安は悪くないと言う話だがスリや詐欺も少なからず存在している。

私の使命は国立美術館の観光中、フェルに万が一のことが無いように護衛することであり、同時彼女を満足させることにある。

勿論家の格の違いを考えれば一方的に突き放したとしても問題は無い。(当然、多少なりともフェレール家の評判に影響はあるだろうが)

それでも私は彼女をこのままにしておくことはどうしてもできなかった。私と彼女は形は違えど、家の都合に振り回されているという意味では同じだ。それ故の同情なのだろうか。

「怖い顔をして、どうかしましたか？」

そうこう理由を考えているとどうも仏頂面になっていたらしい。ふいにフェルが声をかけてきた。

「なんでもないさ、どうすれば君を守れるか考えていた」

フェルは俯いてしまう。何か不味い事を言っただろうか。

国立美術館は石造りの建物で、かなり古い建築様式のように思える。ディアボリック・トライアンフ＜大破局＞で滅んだ魔動機文明よりも前、古代魔法文明のものにも似ている。

ディアボリック・トライアンフフェンデイルは＜大破局＞による被害が比較的少なく、当時の建築が健在であることも稀にある。これもその一つなのだろう。

美術館は一般開放されており、僅かな精鋭の警備員の他にも観光客や市民が散見された。

「フェル。はぐれないよう手を繋ごう」

「はい……」

また俯いてしまった。何故なのだろう。

展示されている品々は水彩、油絵、硬筆の絵画を中心に彫刻、石膏像、武器——戦闘を目的としない——など、年代や様式を問わず様々だ。

「これは恐らく魔法文明時代にこの辺りを治めていた魔法王の威光を

示すものだ。この銘がその証拠になる」

「これは剣神ヒューレを神へと引き上げた魔剣を源流とする魔剣ですね。冒険者なら喉から手が出るほど欲しいはずです」

互いに伝承の知識には優れていたおかげで話題には事欠かない。このような場所を紹介してくれたノエルには感謝せねばならないだろう。

そう、ノエルだ。そろそろ軽食の用意もできただろうか。

「フェル、そろそろ軽食の用意もできただろう。一旦神殿へ戻ろう」

「はい、一年中花が咲き乱れるという丘でのピクニック。とても楽しみです」

繋いだ手が一段と強く握られた。

◆ ”遺跡と花の丘”は噂に違わぬ美しい場所であった。

一面に咲き乱れる色とりどりの花はもちろんのこと、蔓の絡みついた遺跡群は自然と人工物の融和を表現する芸術のようにも感じられる。雲一つない空には太陽が南中し、時折私やフェルから空腹を示す音が鳴る。

布のマットを地面の上に敷き、ノエルが魔動機術を用いてマギスファイアに収納していた小型の机を置いている。

「簡単なサンドイッチを少々。燻製肉に今朝神殿から譲っていただいた野菜を使いました」

「フェルも食べてくれ。ノエルの料理は絶品なんだ」

私の要望と、彼自身が多忙であったことからヴィエール家当主はこの場にいる。もちろん使い魔ファミリアは随伴している。この場には私とノエルとフェル、そして使い魔だけだ。

「如何でしょうか」

「うちの料理人にも引けを取りません。おいしいですよ」

「光栄でございます」

広い空間、広い空。時間はゆったりと過ぎていく。言葉は多く交わされないが、昨夜のように気まずいわけでもなく、優しい風が心地よくこの場を包んでいる。

私はサンドイッチを食べ終えると、特に理由もないが布の上に寝転ぶ。フェルもそれに続いた。

寝転がりフェルの隣まで移動すると顔と顔が向き合った。数秒の後に気まづくなり互いに背けてしまう。

仰向けになって空を見る。雲の流れと太陽の傾きだけが時間を教えてくれる。街の喧騒とも、予定と思惑の絡まる屋敷とも隔絶された広い世界。

いや、違う。隔絶されているのは街や屋敷だ。

冒険者は危険を冒し、命を売り日銭を稼ぐ。私は今まで冒険者は必要な存在だと考える一方で無謀で愚かな人々だとも思っていた。

でも今この瞬間は理解できる。何者にも縛られず、世界を独り占めする彼らに翼が生えているかのように思えた。

そう考えているとふと自分の手が握られる。フェルだ。

フェルも同じことを考えているのだろうか。

私はフェルの手を握り返す。ひんやりと心地良い。

ずっとこうしていたい。このまま二人とノエルと逃げ出してしまいたいとさえ思う。



「若様！・ 敵襲です！」

はつと上半身を起こす。寝てしまっていたようだ。

頭上で巨大な甲虫が銃弾を受けて爆ぜる。私はフェルに覆い被さり、フェルをその破片から守った。

「マックス様……？」

「そのままでは、私とノエルで片付ける」

立ち上がり抜刀する。周囲を確認、南南西——太陽の方向——から複数の甲虫が飛来している。

勘違いでなければこれらはローズイーターと呼ばれる魔物だ。何らかの理由で巨大化した甲虫であり、その原因は丘に咲く花を食することによって身体に魔力を蓄積させたためだと言われている。

正直言つて私とノエルの敵ではない。しかしフェルは違う。私の見立てではフェルは戦士の心得は無い。いかにローズイーターが貧

弱であろうと戦士の心得が無い者が狙われればひとたまりもないだろう。

私は服の襟を掴み鎧の携帯にしてから、腰に下げた矢筒から矢を数本無造作に取り出して飛来するローズイーターの方向へ向ける。そしてナイトメアとしての力を開放し、その顔を異形へと変貌させる。

「風の妖精よ、その力を以て魔を打ち払う矢を放て」

風属性妖精魔法「シュートアロー」、その対象となる数を拡大して行使用する。

この魔法で放たれた矢は必中だ。風が的へと導いてくれる。ローズイーターの動きに合わせて軌道を変えた矢は頭部に突き刺さり、一撃で命を刈り取る。

(これでノエルと合わせて4匹、数えた限りはあと3匹)

仕留めきれなかったことを悔やみ、飛来するローズイーターに備えると、私の背後から透き通った声が響き渡る。

「リルズの神威を以てかの者を打ち払わんことを」

フェルだ。首に聖印を下げていたが、どうやら神聖魔法の心得があるらしい。攻撃神聖魔法「フォース」神の威光を顕現させて敵を討つ魔法だ。

放たれた光弾がローズイーターを弾き飛ばす。当たった箇所焼け方を見るに私の妖精魔法よりも深く神聖魔法に精通しているように思える。

「若様！ 危険です！」

ブブブツと羽音がその音を高くしながら近づく。逆方向からも飛来していたようだ。

目の前の敵に集中していた私は回避が遅れ、その遅れた行動が災いして、鎧が守っていない頬へ直撃する。

その次の瞬間には振り上げたレイピアがそのローズイーターを両断した。

戦いは終わり、私は異貌を解いた。

ローズイーターの角を受けた頬を触ると手が血で汚れてしまった。

私は傷を治すために光妖精魔法を行使しようとしたが、フェルの詠

唱が聞こえてそれをやめてしまおう。

「リルズよ、その力を以てこの者の傷を癒やし給え」

フェルが祈りを捧げると首にかけた聖印が輝き、私の傷跡が暖くなる。回復神聖魔法の初歩である【キュア・ウーンズ】だ。

「折角綺麗なお顔なのですから、傷が残っては勿体無いですよ」

フェルが立ち上がり私の顔を見て話す。

「これくらいならば私の妖精魔法でも事足りるのだが」

「私のせいでマックス様が傷ついたのです。私が癒やすのが道理でしょう」

「礼を言わせてくれ。ありがとう、フェル」

「お礼を言いたいのはこちらです。助かりました」

そうだ。冒険者は常に死と隣り合わせなのだ。

今回のように容易い襲撃だけでない、時には熟練のダークトロールにだって襲われるだろう。

空を飛ぶ鳥は常に狩人の矢を恐れなければならないのだ。

「私、寝転がって空を見たときに冒険者になってみたいって思ったんです」

ふいにフェルが口を開く。私達は同じことを考えていたようだ。

「でも、自由って命がけなんだなってこともわかりました。私は今まで屋敷や神殿の中の狭い世界しか知りませんでしたから」

「君がそう思うのも無理はない。私も同じことを考えていたんだ。自由へのあこがれも、死の恐怖も」

なんだかばつが悪くなり、二人して黙ってしまおう。

「若様、お嬢様、ローズイーターの血で服も汚れた上に、もう時期夕方です、街へ戻りましょう」

◆ ノエルにはいつも助けてもらってばかりだ。

◆ 帰り道の街道でフェルが声をかけてきた。

「その、マックス様はナイトメアなんですか？」

「隠していてすまない、しかしフェレール家の跡取りが私しかいない以上こうするしかないのだ」

フェルは顔をしかめている。当然だろう。ナイトメアや蛮族が持つ“穢れ”は神官にとってご法度だ。彼女は神殿に所属する神官でこそないが、リルズ神殿で教育を受けた身なのだから、嫌悪感を感じても可笑しくない。

「もし嫌なら此度の縁談は断つても構わない」

「とんでもないです。マックス様は私に嫌われることも承知でその力を使ってくれたんですよね？ それを理由に嫌うなんてあるはずありません」

ともすれば、父親か。フェルは後継者でこそないが重要な政略結婚の道具だ。曰くつきの家に嫁がせるのは躊躇われるだろう。

「ありがとう。しかし事が公になれば嫁いだ君まで危うい。私は君を必要以上に危険に晒したくはないんだ」

フェルはまた俯いた。

◆
神殿に戻ってから夕飯時まではまだ時間があるという時、私は水浴びをしたいと通りすがりの神官に尋ねた。

すると彼は浴室まで軽く道案内をした後、使用のための規則を教えしてくれた。つい癖でチップとして10ガメル渡そうとしたら、彼は受け取りを拒否した。聖職者たるもの余分に持つてはならないそうだ。立派な志だと思う。

浴室もその手前の脱衣所も男女共用となっている。

脱衣所には貸出の水着が置いてある棚と使用済みのものを仕舞うための棚、そして脱いだ服を入れるための棚がある。今のところ誰も使っていないようだ。

浴室は簡単なドアと間仕切りで区切られていて、通路の中央に井戸があり、水を貯めるための桶が複数置いてある。

私は身体を拭くための布と水着を借りて浴室へと向かう。

”呼び水用”と共通交易語で掘られた桶には少し水が貯めてある。私はそれを井戸へ注ぐと水を汲んでその桶ともう一つの桶へと水を貯める。

神殿とは言え高級な衣服を着ているため、盗難を警戒して、簡素な

ドアに衣服を掛けておく。

下半身だけ水着を着ると布を濡らして身体を拭いていく。

首、腕、胸、背中、と順に拭いていると、ふいに足音が聞こえる。カタンツという音とともに足音が途絶える。

桶で躓いたか、と次の瞬間にはドアを開けて飛び出す。

フェルだ。彼女は桶を踏んで倒れてしまったようだ。臀部を床について痛そうな表情ですさすっている。脱衣所で予め水着に着替えていたようで、裸同然の肢体が目につく。

「光の妖精よ、この者に癒やしを与えよ」

光妖精魔法【プライマリィ・ヒーリング】だ。臀部の青痣が引いて、痛そうな表情も和らいでいく。

「大丈夫か？フェル」

「また、助けられてしまいましたね……っ？」

フェルが私を見て驚いたような顔をする

そういえば上半身は裸だった。貧相な方とは言え私の胸は女性のそれと見間違えることはない。

「昨夜、抱きしめていただいた時に少し違和感を感じましたが、そういうことだったのですね」

顔からは少し血の気が引いている。女性として生まれて女性として生きてきた彼女に同性との結婚は重い話だろう。

「待ってくれ！フェル！確かに私は性別を偽った。しかし寝室で伝えた気持ちも、あの丘で交わした言葉にも偽りはない！」

言ってからしまった、と思った。これではかえって彼女に気負わせてしまう。

「これでは……。これが父上に知られては縁談が破綻してしまいます」

私は呆気にとられた。てつきり突き放されるものかと思えば彼女は真剣に私との婚姻を考えていたのだ。

「ならばこれは私達だけの秘密にすればいい。夫婦であれば秘密の共有だつてするだろうか？」

「マックス様……いえ、二人きりのときはミリア様と呼ばせてくださ

い」

ミリア、それは女性名だ。今まで通りマックスとだけ呼んでいた方が秘密が露呈する心配も減る。

でもその上で彼女は私を女性として見ていることの証明にこの名を授けてくれたのだろうか。

「ありがたくその名、頂こう。未来のフェリシテ・ド・フェレル」
互いが半裸であることも忘れて抱擁を交わした。寒さは互いの命の温もりが誤魔化し、浴室には二人の心音と息遣いだけが響いている。

二人は次第に顔を近づけ、ついに接吻へ至る。

信頼を確かめるように、1度、2度、3度と軽く繰り返し、4度目になってフェルが私の頭を右手で抑えて唇を奪う。

私はそれに応えるように彼女の唇を舌で押し開き、自分のものではない口内を味わう。

フェルは一瞬驚き顔を退けようとするが、私もまた彼女の頭を押しえつけてそれを離さない。

観念したフェルは仕返しと言わんばかりに私の口内へ舌を侵入させる。

◆ ———このままりルズのように1つになれそうな、そんな気がした。

◆ 以上が私の抱える二つの秘密が露呈した経緯になる。

忌み子で、同性という二つの秘密を知ってなお私を受け入れてくれたフェルには感謝したい。

そしてフェルは私の人生の中で初めて、私を女性として見てくれた人でもある。

今後に関しては次の頁を参照して欲しい。

4頁：真実

「では、縁談は成立という事でよろしいと……？」

「そういうことです、ヴィエール家当主様」

昨日の夜に打ち合わせたとおり、私とフェルは翌日の早朝には着替えた上で合流し、寝起きのヴィエール家当主へに相談を持ちかける。

「式の会場はフェレール家でよろしいですか？」

私は畳み掛けるように次々と言葉を紡ぎ出す。相手の頭が回る前にこちらの要求を飲ませなければならぬ。

昨夜、私達は浴室での出来事の後、同じ寝室で一夜を明かした。

隠喩ではなく文字通りである。そこで彼女の意味を聞き、これからすべきことを計画した。

私の予想通り、彼女は政略結婚の道具として父親からフェレール家の者と肉体関係を持ち、既成事実を作るように指示されていたのとことだ。子供が複数いる貴族では一般的なのだろうが、私の倫理に悖るその指示を看過することはできなかった。

彼女の要望を聞いたところ、少々取り乱しながらも以下の三つを伝えてくれた。

- ・ ヴィエール領から離れる
- ・ ミリアとの結婚
- ・ 父親の大三角州入植への助力阻止

前二つは特に説明はいらぬだろう。彼女にとってヴィエール領にはあまり良い思い出が無いのは想像に易いし（私はその内容に踏み込んで尋ねるような無粋な人族ではない）、そのために私と婚姻関係を持つことを望むのはごく自然なことだ。

問題は最後の一つ。彼女はリルズ神殿での修行中に、大三角州からデイクールへやってきたエルフの冒険者と会ったそうだ。その者の話を聞いてフェルは大三角州への入植事業に反感を覚えたらしい。

さらにフェルも小耳にはさんだ程度の話ではあるが、ヴィエール家はフェレール家とのコネが出来次第、冒険者時代に手に入れたアーティファクトや魔剣で武装した兵団で大三角州への武力を用いた入

植を行う計画があるとのことだ。

私もエルフの集落との交渉に出向いたことがあるが、そこでのフェンデイル貴族への差別は激しく、最初の二年はまともに話すら聞いてもらえなかった。

偏見と差別を失くすために私はアステリア信仰やエルフの民俗学を学び、長い時間をかけて両者の緊張を解すことに尽力してきた。

その努力をヴェイエル公に台無しにされるともなれば黙ってはおけない。

これらの理由から、私達は共に駆け落ちすることを決定した。

こうすればヴェイエル家とフェレール家が繋がることはなく、父上は今まで通り穏健派として大三角州のエルフ達と交渉を続け、ヴェイエル家に干渉の余地は生まれない。

フェルは願ったとおりヴェイエルより離れ、道具ではなく一人の少女として生きる。

そして私もまた、男性としての偽りの生を捨てて女性として生きる。

完璧である。少なくとも当時の私はそう考えた。

今思えばフェルと駆け落ちして冒険者になるという欲望を誤魔化すために詭弁で自分を騙していたのだろう。きっとフェルもそうだ。

もし本当に私が大三角州のエルフ達に誠実であろうとするなら、フェレール家を継ぎ、穏健派として国内での権力を強化していくことが最善のはずだし、フェレール家にいけばフェルも悪いようにはならなかっただろう。

この本を執筆している今の私ならハッキリと言える。私はフェルを愛していて、彼女と共に自由を手にしたかったのだと。

ともあれ概ねこのような経緯で私はフェルとの駆け落ちを決意した。そのためにフェレール領へ場を移すと言い、彼の出立準備が整う前に我々が逃走する算段だ。

「ええ、式を挙げるならそちらの領地というのが通りでしょう」

「同席なさるのであれば出立のご準備を、今日中には王都を出ます」

「それはまた急なものです」

「何か文句がおありでしょうか」

「決してそのようなことは」

交渉は順調だ。次に私がすべきことは決まっている。

「準備ができ次第、馬車の方までお越しく下さい。それではまた後程」
部屋を後にした私はフェルを連れて市場へと足を運ぶ。保存食をおよそ二週間分買い込み、寝袋を用意する。

夜警の彫像という魔法の品も購入した。これがあれば寝ずの番をせずに済む。

一通り準備を終えた私達は馬車を停めていた広場へ向かい、警備の者に出立だと伝えて王都の外へと車輪を走らせる。

目指すはルクスラ帝都。冒険者の国だ。そこであれば経歴は重視されない。重視されるのは冒険者としての腕前だ。そこであれば私達も正体を隠しながら生活を営めると踏んでいる。

城壁の外へ出て、街道をルクスラ方面へ少し進んでのことだ。街道の中央に誰かが立っている。近づくと誰だかわかる。ノエルだ。

軽く膝を曲げ、重心を落として長銃をこちらへ向けている。臨戦態勢だ。

「待て！ ノエル、私だ。争う必要は無い」

「私の使命はフェレル家の繁栄にあります。故に若様が無謀な行動をとられた場合、それを止める義務があります」

「ミリア様、私は……」

「下がっている。いいだろう、ならば力づくで押し通るまで」

私は御者台から降りて、剣を引き抜く。鎧も身体も戦闘の為に変化させる。

練技で体を強化し、異貌を解放。軽装鎧に身を包んで相対する。

「来ないのであれば先手は頂くぞ！ ノエル！」

迂闊に駆け出さない。不用意に近づいても間違いなく射手の体術で回避される。

少しずつ前進しながら私は矢筒から一本の矢を取り出して魔法で放つ。

「容赦なし、ですか。しかし」

肩口に刺さる矢をもともせず、ノエルは真つ直ぐに銃口を向ける

「ターゲットサイト・展開、装填・トランクライザー・バレット」

息を吸って魔動機文明語でマギスファイアに合言葉で指令を出す。コマンドワード

ノエルはまだ動かない。

私が隙を見せる瞬間を狙っているのだ。

「射出」シユート

一直線に私の胸めがけて放たれた弾丸を半身を捻り回避する。まだ大丈夫だ。

「装填・次弾。ターゲットサイト・展開」

第二射までのインターバル。私はこれを狙っていた。次弾装填とその射出までの僅かな時間、その間に私は残りの距離を詰め、手元を狙ってレイピアを突き出す。

ノエルは半歩引いてそれを躲し、道の脇に長銃を投げ捨てて二丁の拳銃を抜く。

「ターゲットサイト・展開、バーストショット・装填——射出」シユート

直後6発の弾丸が私へと襲いかかる。いくつかは喰らった。魔法の弾丸は鎧を貫いて私に傷を付ける。

怯んでいる場合ではない。

「揺れよ！」

ナイトメアがその力を解放した時、魔法行使のための発声を省略することができる。私は慣れない故に多少発声しなければ上手く行使できないのだが。

私は大地の妖精の力を借りて、ノエルの足元をゆさぶる。

「組手の時とは勝手が違いますね」

「当然だろう！」

足元の狂った瞬間に私はレイピアを横に一閃する。

ノエルはそれを身体を大きく反らすことでやり過ぎし、その勢いのままつま先で私の手元へ蹴りを放つ。

——あの時と同じだ。このままでは良くて相討ち——

「リルズよ、かの者に祝福を与え給え」

体が、足取りが少し軽くなった。神聖魔法「ブレス」による加護だろう。ある程度の時間、その者の潜在能力を引き出す魔法だ。

そう、今の私にはフェルがいる。何も恐れることはない。

後転直後にも6発の弾丸が飛来するが、その全てを加護の力で回避する。

「そこをどいてもらうぞ！ ノエル！」

土、炎、水、風、光、闇。六種の妖精の力を借りて放つ攻撃魔法「カオスショット」今の私の魔法の中では最大威力だ。

六色の光が混ざった光弾がノエルの全身を強く打ち付ける。私は空かさずレイピアを下から上へ振り抜いた。

「カオスショット」の閃光で視界が塞がっているが、微かに手応えがある、飛び散った血が頬へ付いた感触もあった。

だが油断は禁物だ。窮地に追いやられたノエルを私は見たことがない。

「どうやら私に今の若様を止められるだけの力はないようです」

その刹那、破裂音と強烈な煙幕が私の視界を奪った。魔動機術「スモーク・ボム」だ。

「ノエル！ 何をする気だ！」

「このような失態を晒してはフェレル領に帰ることはできません。私は新たな主人を探すことにします。お元気で」

煙幕が消え失せたときにはノエルという存在の痕跡の一切が残されていなかった。

◆
それからは特に大した危険もなくルキスラまで辿り着くことが出来た。

私達はくあまい卵焼き亭という店に所属することにした。フェンデイルでも良い評判をよく聞く店だ。面倒見のいい店主や、幹旋される依頼の条件の良さなどを考慮して決定した。

その後の私達の生活については、また別の本で描くことにする。

次の頁では、私が欺瞞に塗り固められた人生を脱し、真実の生を手に入れるまでの過程を描くこととする。

それ以降の事はまた別の本で語ることになるだろう。

◆ 壁一面が本棚で埋め尽くされた大部屋。そこには2人の男と3人の女がいた。

男の1人は重い金属鎧を着て、2つの盾を背負っている。種はリルドラケン。《ラステンルフト双盾護身術》《ルキスラ銀鱗隊護衛術》《ジアンブリック攻盾術》の使い手のようだ。

男の1人は首に太陽神ティダンの聖印提げている。種は人間。《不死者討滅武技バニシングデス》の使い手だ。

女の1人は腰の右に長剣、腰の左に拳銃を吊っている。種はルーンフォーク。《マルガIIハリ天地銃剣術》の使い手だ。

女の1人は奇妙な弦楽器を持っている。露出の多い扇情的な服装で、種は人間。《カサドリス戦奏術》の使い手だ。

女の1人は純銀を原料としたゴーレムを連れている。方には鳥の形をした使い魔ファミリアがいる。種はハイマン。《テイルカンドル古代光魔法》《ルシエロイネ魔導術》の使い手だ。

「何でこんな本が吸血鬼ノスフェラトゥの屋敷にあるんだ？」

「創作ってわけじゃなさそうね。確かにフェレルという姓の貴族は存在したし、これが事実なら不可解な事実にも筋が通るわ」

ティダン神官の男とゴーレムを連れた女が話している。人族の身の限界まで力を高めた手練れ達だ。私とて彼ら全員を単身相手にするには力不足だろう。

彼らを始末せねばならない。私と彼女の幸せな永遠を邪魔されては癪に障る。

◆ 私は急いで「クリエイト・アンデッド」を行った。幸いにも私の居城は広く、すぐに玉座まで辿り着かれることは無いだろう。充分な戦力を以って彼らを迎え撃つ必要がある。矮小なる人族が如何に恐ろしいかを私は知っている。忌み子といえど私はかつて人族だったの

だから

「邪魔な彼らを消さなければならぬ。良い子にしているんだよ、フェル」

「はい、ミリア様。どうか御無事で」

このリヤナンシーアサシンも戦場に送り出せば勝率は確実に上がるだろう、それでも私はフェルを死地に送り出すくらいなら、自らの命を投げ出してもいい。

彼らは私を何と呼ぶのだろうか。ヴァンパイアリイと月並みな名前で呼ぶのだろうか。

それともマクシミリアン・ド・フェレールと呼んでくれるのだろうか。